

I 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。解答番号は、

1

5

20

。

A ミュージアムにおいてテレビ番組や新聞記事に相当するのは、学芸員や展示会社によってつくられた「展示」である。たとえば企画展であれば、国立か県立か、東京か佐賀か、一月か八月(夏休み)かといった違いは展覧会の内容に大きく作用するし、来館者層も大きく異なる。

A、企画展の多くはマスコミ(企業)の主催や共催によって支えられており、展覧会の構成や方針にはこれらの主催者や展示会社も関わるため、テレビや新聞同様に決してニュートラルとはいえない。したがって展示というメディアが、国・地域・運営主体・館種、さらには主催者や学芸員、予算や規模といった容れ物や背景と A であることは間違いでない。しかし、一方で、テレビや新聞などのマスメディアとは異なり、究極的にはひとつとして同じミュージアムはないうえに、その数は膨大である。

さらに展示室ですべての展示を隈なくみる来館者のほうがアットウ的に少ないうえに、展示室での体験は、ミュージアム体験の一部でしかない。オーディエンス研究にエイキョウ<sup>2</sup>を受けた来館者研究が、一定の(あるいはある目的から照らした成果としての)意味を持ちつつも、来館者の体験を捉え切れていないと指摘されるのはそれゆえである。

何よりも、ミュージアムは、展示やそのメッセージだけでは語りきれない、 I なメディアである。ミュージアムにおけるメディアとは、建物であり、空間であり、意匠であり、展示であり、ひとつひとつのモノ(一次資料)であり、模型や解説パネルや音声ガイド(二次資料)であり、それらの組み合わせによる総体である。つまり複数のモード、チャンネルのメディアが総合的に同時に作用してコミュニケーションが生起し、来館者の体験を構成しているという意味においてきわめて多層的かつ身体的であり、単純にテキストとして読み解けるわけではない。さらに、ミュージアムのステークホルダーは、運営主体(公立の場合は県や市区町村)、主催者、学芸員、館スタッフ、展示会社、展示協力者、来館者などタキ<sup>3</sup>にわたり、送り手と受け手を比較的単純化できるマスメディアとはこの点においても異なっているといえよう。したがって、最近では、ミュージアムのメディア性を、テキストをベースとしたマスメディアに I よりも、スマートフォンをはじめとするデジタルメディアやそ

のテクノロジーとの比較や関係の中で論じることのほうが多い。B 展示におけるデジタルテクノロジーの活用が、展示が語る歴史や人々の記憶をどのように再構成するのかにシヨウテンをあてた事例研究なども増えている。このように、「メディアとしてのミュージアム」という視点があることで、他のメディアとの比較や対比が行われ、ミュージアムのさまざまな特徴が逆照射される。

さらに、ミュージアムの空間は、いまやソーシャルメディアやモバイルメディアといった外部の「空間」とも接続し、もはや物理的な空間に押しとどめられることはなくなった。展示室に身体があつたとしても、スマートフォンというデバイスを通してオンラインの空間と、外や日常と絶えずつながりつづける回路を手に入れた今、そのような人々のミュージアム体験をこれまでと同じものとして考えることはできない(光岡 二〇一七)。再び冒頭の「トマトスープ事件」に言及するならば、環境運動家はまさにこのような現在のミュージアムの空間の中で、きわめて効果的なコミュニケーションを成立させた。事件の一部始終は、彼ら自身と、その場に居合わせた来館者やメディア関係者によってSNSに投稿され、瞬く間に拡散した。そして、彼らの活動に賛同する多くのサポーターから、組織の活動資金を得て、次のプロテストを可能にしているのである。<sup>(注4)</sup>

B メディアとしてのミュージアムのこのような拡張的な作用を捉えるには、メディア研究でいうところの「媒介作用 (mediation)」や、「メディア化 (mediatization)」という概念が不可欠となる。九〇年代に「媒介作用」という概念を提示したロジャー・シルバーストーンは、メディアが日常に遍在しながら私たちの経験の中心にあることや、私たちがひとつのメディアから次のメディアへと絶えず移り続けていることを指摘した。そして、その中で絶え間ない「意味の環流」をきちんとプロセスとして捉えることの必要性を説いた(Silverstone 1999)。ミュージアムもこうした一連のプロセスの一環として組み込まれているはずであり、その経験を他のメディアと接続させながら「意味の環流」の中で捉えつつ、それがミュージアムにとってどのような意味を持つのかを説明できることが求められているのではないだろうか。C、「メディア化」という概念は、ニック・ク

ドリーによればドイツ語圏やスカンジナビアなどで使用されてきた言葉で、メディアが長期にわたり私たちの社会や文化全体を構築する様子を、「グローバル化」や「個人化」に匹敵する構造的な移行として捉えたものであるという(Couldry 2012)。クド

リーが指摘するように、「メディア化」の概念は曖昧さを残すが、ここで重要なのは、「媒介作用」と「メディア化」をめぐる研究の双方に、「メディアとはなにか」あるいは「メディアは人々の日常にどのような作用をもたらすのか」という究極的な問いがあることだ。ミュージアムのメディア論では、「ミュージアムとはなにか」という問いが常に投げかけられていること、さらに、ミュージアムの中のメディア経験やコミュニケーションの在り方を、私たちの日常と切り離して考えるのではなく、フロアの中で考える視点を失わないことが重要である。先述したように、教育学的発想で行われた来館者調査の最大の陥穽<sup>(注5)</sup>は、この体験の

## II

ことにあるからだ。

ミュージアムそのものがメディアであること、さらにミュージアムの中に複数のメディアが介在していることを前提に、「ミュージアムとはなにか」という問いを「メディアとはなにか」を問うのと同じくらい根源的な問いとして捉えていくことが、ミュージアムのメディア論にとって重要であることをみてきた。

もうひとつ重要なのは、権力への視座である。メディアと同じく、ミュージアムも制度化された、政治的な存在である。そうしたミュージアムの文化的・社会的・政治的な文脈について具体的に考えていくには、先のようなメディア研究と対になるかたちでカルチュラル・スタディーズ(文化研究)という領域が重要になってくる。近年の欧米圏におけるミュージアム・スタディーズは、既にこの領域に **ウ** いる。

ミュージアムのミュージアム性を問うことは、一言でいえば、ミュージアムを絶えず権力作用の働く文化実践の場として捉えることを意味する。ミュージアムの権力性については、既に多くの指摘がなされているが、それらの **エ** となっているのはなんとといってもミシエル・フーコーの理論である(Foucault 1966, 1972, 1975, 1976)。アイリーン・フーパー・グリーンヒル、トニー・ベネット、吉見俊哉など複数の研究者が、ミュージアムにおける収集・分類・展示といった日々の活動やそれらを支える知の枠組み(エピステーメ)の権力作用、ミュージアムや博覧会で人々が獲得するまなざしや規律・訓練化された身体について、フーコーの理論を援用しながら歴史社会的に分析している(Hooper-Greenhill 1994; Hooper-Greenhill ed. 1995;

Bennett 1995; 吉見 一九九二)。

このような枠組みから説明される「文化装置」としてのミュージアムの権力性は、今ではわざわざ指摘されるというよりも、さまざまなミュージアムの文化研究の通底音として流れているといつてよい。ミュージアムが文化研究の領域で鋭く論じられるようになったのは、フーコーの理論に負うところがきわめて大きいといえよう。

カルチュラル・スタディーズ(文化研究)は、そもそもこれまでのさまざまな学問領域の手法を援用した領域である。

**D**、言語学、記号論、芸術理論、文学理論、人類学などさまざまな領域のアプローチや方法論を吸収・援用しながら「文化」を問い、実践する研究領域であり、その学際性を強みとする。ジャウデイン・サルダーとボリン・ヴァン・ルーンは、一見枠づけることが不可能なカルチュラル・スタディーズの核心を、次のように定義する。すなわち、(1)問題を文化的実践という観点から理解し、それを権力との関係において考えること、(2)文化を社会的・政治的な文脈の中で分析すること、(3)文化には、対象と場という二つの機能があると考えること、(4)理論と実践の二項対立を乗り越えようとすること(経験主義と合理主義)、(5)文化は中立ではなく、価値判断や政治的位置と関わるものとして捉え、社会の<sup>5</sup>ヘンカクを<sup>5</sup>目指すこと(Sardar and Loon 1998)。換言すれば、カルチュラル・スタディーズとは、「場」や空間を想定し、そこでの **III** を捉えることを目指しているといえる。したがって、メディア研究と文化研究が交錯する地点においてミュージアムを考えることは、ミュージアムの空間性、権力性、社会性を、横断的に可視化するだけでなく、<sup>C</sup>理論と実践を架橋することをも含んでいる。

(村田麻里子「メディアとしてのミュージアム」『岩波講座 社会学 12 文化・メディア』所収)より)

(注1) ステークホルダー——利害関係者。

(注2) ソーシャルメディアやモバイルメディア——情報を発信・交換できる、SNSやブログ、スマートフォンやタブレットなど、マスメディア以外のメディアの形態。

(注3) 冒頭の「トマトスープ事件」——本文の前で説明された事件のこと。二〇二二年、環境運動団体がロンドンの美術館でゴッホの絵画「ひまわり」にトマトスープをかけたうえで、自分たちの手を接着剤で壁に貼りつけ、自説を主張した。同様の事件が世界各地の美術館で発生した。

(注4) プロテスト——抗議。

(注5) フロー——流れ。

(注6) 陥穽——落とし穴。

問1 ——線1～5を漢字で書いたときに用いる字として最も適当なものを、次の各群の①～⑥のうちから、それぞれ一

- |   |       |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|-------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | アットウ  | ① | 凍 | ② | 臆 | ③ | 倒 | ④ | 等 | ⑤ | 唐 | ⑥ | 透 |
| 2 | エイキヨウ | ① | 響 | ② | 恭 | ③ | 驚 | ④ | 脅 | ⑤ | 矯 | ⑥ | 興 |
| 3 | タキ    | ① | 幾 | ② | 軌 | ③ | 危 | ④ | 毀 | ⑤ | 机 | ⑥ | 岐 |
| 4 | シヨウテン | ① | 衝 | ② | 涉 | ③ | 祥 | ④ | 承 | ⑤ | 焦 | ⑥ | 奨 |
| 5 | ヘンカク  | ① | 穫 | ② | 郭 | ③ | 殻 | ④ | 革 | ⑤ | 覚 | ⑥ | 嚇 |

問2 — 線 A「ミュージアムにおいてテレビ番組や新聞記事に相当するのは、学芸員や展示会社によってつくられた『展示』で

ある」とあるが、「ミュージアム」における「展示」と、「テレビ番組や新聞記事」との共通点は何か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、6。

- ① 国や地域、場所、時期など、人の裁量ではコントロールできない領域が大きい点。
- ② 内容や質が、構成を担当する人の力量よりも予算や規模によって左右される点。
- ③ 多くがマスコミの意向や方針を全面的に受けていて、独自性に乏しい点。
- ④ 国・地域・運営主体などがそれぞれ異なり、ひとつとして同じものがない点。
- ⑤ 主催・共催する企業の思惑や利害関係を反映する必要があり、中立的ではない点。

問3

A D に入る語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号を二回以上用いてはならない。もし用いた場合は、同じ番号の解答をすべて誤答とする。

- 解答番号は、A 7 B 8 C 9 D 10。
- ① また
  - ② たとえば
  - ③ しかし
  - ④ すなわち
  - ⑤ 一方

問 4

ア

エ

なさい。解答番号は、ア

11

イ

12

ウ

13

エ

14

。

に入る語句として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び

ア ① 不可分

② 不可逆

③ 不可欠

④ 不可解

⑤ 不可避

イ ① けしかける

② まぬかれる

③ そののかす

④ なぞらえる

⑤ しつらえる

ウ ① 手をこまねいて

② 足を踏み入れて

③ 頭を抱えて

④ 目がくらんで

⑤ 木で鼻をくくって

エ ① 規則

② 定義

③ 基底

④ 口実

⑤ 企図

問 5

I

に入る語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

15

。

① 絶対的

② 究極的

③ 根源的

④ 重層的

⑤ 象徴的

問6 — 線B「メディアとしてのミュージアムのこのような拡張的な作用」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

16。

① モバイルメディアによって、ミュージアムは物理的な空間にとどまらず、オンライン空間や日常空間における展示が可能になったということ。

② デジタルメディアによってミュージアムがオンラインや日常と接続し、物理的な空間という制約を乗り越えたことで、外部とのコミュニケーションが可能になったということ。

③ スマートフォンが普及したことで、ミュージアム内の出来事がSNSで外部に発信されるようになり、ミュージアムに  
いなくてもミュージアムを体験できるようになったということ。

④ デジタルテクノロジーの進展によって、ミュージアムのメディア性が展示に限らなくなり、音声ガイドなど複数の要素からなる総合的なものになったということ。

⑤ ソーシャルメディアの発達によって、ミュージアムが外部の空間と接続したことで、環境運動家が外部にメッセージを発する格好の場となったということ。

問7

II

に入る言葉として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

17。

① 全体性や相対性を無視してきた

② メディア性を重視しすぎてきた

③ 普遍性を全面的に忌避してきた

④ 単純化や構造化を回避してきた

⑤ 権力性や政治性を強調してきた

問8

Ⅲ

に入る言葉として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

18

- ① それぞれの学問領域の共通性
- ② 政治的権力拡大のための方法論
- ③ 文化研究の枠組みや核心
- ④ 文化実践における権力作用
- ⑤ ミュージアムと文化の結節点

問9

——線C「理論と実践を架橋すること」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

19

- ① さまざまな学問の理論や手法を援用して事象の権力性を分析するメディア論と、環境運動家の実践や来館者の事例をもとにメディア性を考える文化研究を、ミュージアム研究が統合しているということ。
- ② ミュージアムやメディアの根源的な意味を問う理論研究としてのメディア論と、実践の場における権力の働きを分析する文化研究を、ミュージアム研究がつかないということ。
- ③ テクストをもとに事象のメディア性を理論的に分析するメディア論と、政治権力が実際に働く実践の場を明らかにしていく文化研究を、ミュージアム研究が総合しているということ。
- ④ 「媒介作用」や「メディア化」の概念ですべての事象をメディアとして理論化するメディア論と、任意の空間を権力の実践の場として政治化する文化研究を、ミュージアム研究が応用しているということ。
- ⑤ ミュージアムにおける展示という実践を来館者の動向をもとに分析するメディア論と、ミュージアムという概念の権力性を理論的に問う文化研究を、ミュージアム研究が橋渡ししているということ。

問10 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

20。

① ミュージアムは、古来権力が働く実践の場として分析されてきたが、メディアとしての役割が加わったことで、その研究が複雑化している。

② ミュージアムは、とすれば容易に政治性を帯びて権力が支配してしまうので、メディア論研究の成果を参照しながら中立的な展示を目指すべきである。

③ ミュージアムにおける展示は、マスメディアにおけるテレビ番組や新聞記事に相当し、送り手と受け手のそれぞれの立場からさまざまに論じられている。

④ ミュージアムは、私たちの日常のいたるところにあるメディアの一つであり、私たちの経験や意味は他のメディアにつながる連環をなしている。

⑤ ミュージアムの権力性はフリーコーの理論をもとに捉えられてきたが、今ではその成果が忘れ去られ、指摘されることが少なくなってきた。

II 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。解答番号は、

21

5

41

。

映画『ジョーカー』（二〇一九年）では、主人公がニューヨーク・ブロンクス地区の階段で踊るシーンが有名となった。しかし、膨大な観光者が詰めかけたことで住民の間で不安が生まれ、自分本位の観光に批判が集まった。国内でも映画『君の名は。』（二〇一六年）の舞台となった階段が話題になり、誰かにとつては単なる日常行動圏でしかない地点が<sup>1</sup>イッキョに有名観光地と化した。その土地で日常を送る住民には、ある日を境に見知らぬ人が集合し、何か写真を撮り合っている様は気味悪く映りうるだろうし、観光を通じた部外者のサットウ<sup>2</sup>は日常行動の動線を阻むものにもなりうる。

こうした軋轢<sup>あつれき</sup>は、作品の指定する「土地との関わり」と、日常行動のそれがすれ違っていることから生じていると言える。大抵の居住者にとつて、観光者が愛<sup>あ</sup>でる風景は、慣れ親しんだ風景でしかない。観光者はアウトサイダー（部外者）であつて、その土地に住まう人々のような仕方<sup>かた</sup>で、土地と関わるわけではない。

A、良識ある観光者も当然いるし、観光者同士でマナーを訴え合うような動きは珍しくない。聖地巡礼について言えば、コンテンツを通じてその土地への愛着を育み、その地域に居住したり、毎年長期滞在したりするようなファンもいる。観光者と住民はしばしば対立するけれども、常々ア<sup>ア</sup>が悪いわけではないからこそ、住民と観光者の関係は、観光学の重要な研究テーマの一つなのである。

A 多くの人を振り回した新型コロナウイルスの流行は、住民（当事者）と観光者（部外者）の關係に新しい光を投げかけている。「街から観光者が消えたのに近所のポイ捨てはなくならなかった。観光者が捨てていたと思っていたのに、そうではなかった」という趣旨の読者投稿が京都の地元紙に掲載されていたという。京都人は、色々なことを観光者のせいにしてきたところがあるのかもしれない。

3 バクゼンとした不満や不安が適切な出口を見つけれないとき、特定の文化集団にその責任が着せられることがしばしばある。京都が色々な事態の責任を観光者という部外者に押しつけてきたように、大阪は大阪で、奈良は奈良で、色々なことが何か

や誰かのせいにされてきたのだろう。観光者、特に外国人観光者やコンテンツツーリストは、不満の手頃なはけ口になっていたところがある。<sup>(注1)</sup>

加えて、住民は観光からメリットを得てもいる。経済的な面だけではない。自分たちの土地を理解し、その文化的・社会的個性を際立たせていく「差異化」と呼ばれるプロセスにおいて、ほかならぬ部外者の力を借りているのだ。その土地らしさ(個性)を見出し育てるのは、居住者のような「内からの視線」ではなく、部外者のような「外からの視線」だということである。

土地に習慣的に関わっているだけの住民は、何を新鮮に感じ、何が見所になりうるのかといったことに基本的には気づかない。  
B、観光者のようなアウトサイダーこそが、その土地を差異として経験することができるといえる。住民が土地の魅力を発見できるとすれば、部外者のような視線を持てたときだけである。

もちろん I それ自体が売りになることもある。しかし、それは「都会において失われたように感じられる I」にほかならず、結局は外から見ることで発見された一種の II であり、やはり部外者が抱く幻想が土地の魅力として投影されているのだ。<sup>B</sup> 部外者の視線は、善かれ悪しかれ無視できない公共的含意を持っている。

C、私の勤めている大学で出された「その物との付き合いが終わった後のことも考えられた製品を作る」という課題に、京土産という切り口で取り組んだ学生がいた。その学生は、京都の土産を色々調べた上で舞妓というよくあるモチーフを選んだ。舞妓のエキゾチックなイメージと神社や石畳の醸し出す風情との結びつきは世に言う「京都らしさ」そのものであり、実際、舞妓は多くの土産に I として用いられている。

とはいえ、もちろんそれは幻想でしかない。当然ながら、京都人全員が舞妓なのではないし、観光者のほとんどは舞妓に接することがない。また、観光者が舞妓だと思っただけで見て見ているのが、実際の舞妓ではなく舞妓のような風体になって辺りを散策している別の観光者であるというのによく見る光景だ。

それに、中華、学生街、ラーメン、古書街、ツバメソース、近代建築、天一のスープ、坊さん、洋菓子、パン屋、カフェ、猥雑な飲み屋街だって、同じくらい京都を象徴するものであってもよいはずだが、これらが「京都らしさ」の代表選手となることは

それほどない。舞妓、着物、和菓子、茶、カイセキ、寺社仏閣、紅葉、送り火、鴨川<sup>かもがわ</sup>辺りが「京都らしさ」の一軍なのだろう。

先に触れた学生も、「色々な土産に舞妓さんが使われていたけれど、「京都らしさ」と舞妓さんを結びつける発想はタンラク<sup>5</sup>的にも感じる」と迷いを口にしていた。そのためらしいは適切だ。

にすぎない。歴史家のダニエル・ブーアステインは、事前イメージからのズレを許容しない経験を「隔離」と呼び、観光者や観光産業を批判した。しかし裏を返せば、<sup>C</sup>そう批判されるほどに観光と幻想は切り離せないのである。

人は幻想抜きに生きることができないというのも確かなことだ。人を動かすのは生のままの現実でも、乾いた日常の反復でもない。イメージこそが人に欲望を抱かせ、行動を実際に変えることができる。人は幻想を見るためにわざわざ遠方から

**エ** 京都まで来るのだし、観光者は進んでイメージにくるまれている。東京の大丸<sup>(注4)</sup>でも食べられると知りながら、

Instagramで事前に見つけた有名な抹茶スイーツを「京都ならではの！」と喜んで注文し、それを知るときかけとなった写真とほぼ同じ構図で写真撮る。そこには何の不思議もない。

他方で、実態をさほど反映していない幻想に住民が迷惑しているかという点、必ずしもそうではない。「こないだ京都市の友人が「抹茶スイーツの店に行列ができて。いままであんなん食べるの観光客だけやと思ってたのに」と言ってたな」と、観光学者の中井治郎がソーシャルメディアに書いていた。これもパンデミック<sup>(注5)</sup>が気づかせた一つの発見である。広義の住民もまた、

**a** を味わうのだ。

観光が住民との軋轢を生むことは珍しくないし、住民がぎょつとするイメージが投影されることもある。しかし、そうした幻想こそが土地の魅力を教え、新鮮な関わり方を見せてくれているのかもしれない。例えば京都の住民が抹茶スイーツを頼むとき、その人は観光者と手を取り合っているようなものなのだ。

ところで、対立構図は「複数の文化が争点となるところでは極めて問題含みである」とエドワード・サイードは語っている。ほとんどの文化は「同質的でそれ単体でまとまっている」ということは全くなく、どちらが良い悪いなどは決められないからだ」。観光者と住民の関係にも適合する視点であり、本稿もこうした絡まりを描いてきた。

**D** 人は常に偏りを抱えており、党派的な対立を進んで作りたがる場所がある。様々な心理実験が「根本的帰属の誤り」——判断する際に気質的な側面を重視しながらも、状況や事情を軽視する傾向——の存在を明らかにしてきた。この心理的傾向は、敵対者の印象を迫認するように働く。敵対的な姿勢は、敵対する個人や陣営の本来的な性質のせいだとされ、友好的な姿勢は、外圧や劣勢など状況の力に強いられたとみなされる。

人間には、様々な幻想を他者に帰属させる傾向に加えて、自分の抱いているイメージを進んで変えようとしないう傾向がある。それが私たちの不安を煽る人物たちの印象ならなおさらだ。人間は一度対立すると、互いの邪悪さや愚かさを多角的に確認し始める。私たちはどうしようもなく、そういう生き物だ。

人間の認知にあるこうした「バグ」が息苦しさや不安を加速させ、分断や軋轢を深めている。それでも異なる人たちと何とか折り合って共に生きるには、人は自分の偏りや党派性を認識することから始めねばならない。公認心理師の萩原広道の言葉を借りて私なりに表現するならば、「自分がいつでも人を傷つけようと知ることから、多様性への配慮は始まる」のである。

だが、自分の善良さを疑うことは、共生のスタート地点でしかない。「共感」によって、対立や分断を超えることはできない。壁の向こうの人たちを愚かで不気味だと感じる心の習慣はすぐには変わらず、共感的に相手の立場を想像することが難しいからだ。ただし、私たちは、分断線の向こう側を頭で「理解」することはできる。事実や知識を積み上げる「理解」である。

**E**、観光者と住民の幻想の絡まりを解きほぐすように、人と人の複雑な相互作用を地道に観察して知識を得ること。こうした理解の先に、前より少し優しい社会があるのかもしれない。

(谷川嘉浩「観光が土地との関わり方を教える——聖地巡礼、住民、イメージ」(「世界思想」2021年春号所収)より)

(注1) コンテンツツーリスト——映画やドラマ、アニメなどの舞台となった土地を訪れる旅行者。

(注2) ツバメソース——京都に本店を構えるツバメ食品株式会社の商品名。

(注3) 天一——京都に本店を構える中華そばチェーン「天下一品」の略称。

(注4) 大丸——百貨店の名前。

(注5) パンデミック——感染症などが世界的に流行すること。

問1 ——線1～5を漢字で書いたときに用いる字として最も適当なものを、次の各群の①～⑥のうちから、それぞれ一

つずつ選びなさい。解答番号は、1  2  3  4  5 。

- |   |      |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | イツキヨ | ① | 巨 | ② | 虚 | ③ | 挙 | ④ | 拒 | ⑤ | 拗 | ⑥ | 距 |
| 2 | サットウ | ① | 騰 | ② | 逃 | ③ | 陶 | ④ | 塔 | ⑤ | 討 | ⑥ | 到 |
| 3 | バクゼン | ① | 縛 | ② | 漠 | ③ | 麦 | ④ | 爆 | ⑤ | 幕 | ⑥ | 暴 |
| 4 | カイセキ | ① | 戒 | ② | 拐 | ③ | 悔 | ④ | 懷 | ⑤ | 楷 | ⑥ | 怪 |
| 5 | タンラク | ① | 短 | ② | 端 | ③ | 丹 | ④ | 淡 | ⑤ | 綻 | ⑥ | 旦 |

問2   に入る語句として最も適当なものを、次の①～⑦のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

い。ただし、同じ番号を二回以上用いてはならない。もし用いた場合は、同じ番号の解答をすべて誤答とする。

解答番号は、A  B  C  D  E 。

- |   |      |   |     |   |     |   |      |
|---|------|---|-----|---|-----|---|------|
| ① | 例えば  | ② | しかし | ③ | もし  | ④ | こうして |
| ⑤ | ところで | ⑥ | むしろ | ⑦ | ただし |   |      |

問3

ア

エ

なさい。解答番号は、ア

31

イ

32

ウ

33

エ

34

。

に入る語句として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び

ア ① 気性

② 折り合い

③ 旗色

④ 間

⑤ ばつ

イ ① 意匠

② 機能

③ 概念

④ 一計

⑤ 魂胆

ウ ① 幸いにして

② 既にして

③ いながらにして

④ 往々にして

⑤ 如何にして

エ ① 身を粉にして

② 泡を食って

③ 鼻をあかして

④ きびすを返して

⑤ 大枚はたいて

問4

——線 A「多くの人を振り回した新型コロナウイルスの流行は、住民(当事者)と観光者(部外者)の関係に新しい光を投げかけている」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

解答番号は、35。

- ① 新型コロナウイルスの流行によって、観光地に対する、その土地の住民が持つ認識と観光者が持つ認識との違いが判明したということ。
- ② 新型コロナウイルスの流行によって、良識のある観光者の存在が観光地の住民に認知され、住民は観光者に対する認識を改めたということ。
- ③ 新型コロナウイルスの流行によって、観光地に訪れる部外者が気味悪く見えてしまうその土地の当事者の心理が浮き彫りになったということ。
- ④ 新型コロナウイルスの流行によって、当事者が部外者にその土地の様々な事態の責任を押しつけていたことが明らかになったということ。
- ⑤ 新型コロナウイルスの流行によって、人は日頃の不満などの責任を、ある手頃な特定の文化集団に押しつけるということが露見したということ。

問5

解答番号は、

I

II

36

。

に入る語句の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

- |   |   |     |    |     |
|---|---|-----|----|-----|
| ① | I | 観光  | II | 日常  |
| ② | I | 日常  | II | 非日常 |
| ③ | I | 差異  | II | 幻想  |
| ④ | I | 非日常 | II | 日常  |
| ⑤ | I | 幻想  | II | 非日常 |

問6

——線B「部外者の視線は、善かれ悪しかれ無視できない公共的含意を持っている」とあるが、「部外者の視線」が「公共的含意を持っている」と筆者が述べるのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

37。

- ① 住民が自分たちの土地の文化的・社会的個性を見出す過程において、その土地と習慣的に関わっている部外者の視線が必要であるから。
- ② 住民が自分たちの土地を差異化するプロセスにおいて、アウトサイダーである観光者との軋轢を解消することが重要であるから。
- ③ 住民が自分たちの土地を理解して個性を際立たせようとする場合、その土地と他との差異を身をもって感じる必要がある。部外者の力が必要となるから。
- ④ 住民が「外からの視線」で自分たちの土地を見るためには、第一に部外者が抱く幻想について理解することが必要不可欠であるから。
- ⑤ 住民が観光によって経済的なメリットを得るためには、部外者の視線で考えたうえで観光者との対立構造を変えていくことが必要であるから。

問7 — 線C「そう批判されるほどに観光と幻想は切り離せない」とあるが、どうということか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、38。

- ① 観光産業は人が観光地に幻想を求めて訪れるものであるということを受け入れ、幻想に寄り添っているということ。
- ② 人の行動を実際に変えられるのは幻想であるため、幻想の操作によって今日の観光が成り立っているということ。
- ③ 今日の観光産業において、部外者が抱く事前イメージと幻想との間にズレが生じることは許されないということ。
- ④ 観光は部外者に幻想を抱かせるものであるため、観光と幻想は切っても切れない関係にあるということ。
- ⑤ 人は現実からの脱却を求めて観光をするため、観光はその要求に応じて幻想を見せているということ。

問8

a

に入る言葉として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

39

- ① 部外者との軋轢
- ② 乾いた日常
- ③ 「外からの視線」
- ④ 経済的なメリット
- ⑤ 土地の幻想

問9 — 線D「異なる人たちと何とか折り合って共に生きる」とあるが、筆者はこのためにどうすることが必要だと述べているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

40。

① まずは共感を試み、その後に事実や知識を積み上げ、自分とは異なる人たちとの間にある絡まりを解きほぐすような理解をすること。

② 第一に自らの偏りや党派性を認識し、そのうえで分断線の向こう側を共感的に想像すると同時に、事実や知識を積み上げるような理解をすること。

③ まず自分の善良さを認識するところから始め、その後分断線の向こう側を観察などの手法によって知識を積み上げるといった理解をすること。

④ 人と人との相互作用について観察することで知識を得る形で、自分とは異なる人たちへの理解を形成した後に、共感的に相手の立場を想像すること。

⑤ まずは自らの善良さに疑問を投げかけ、自分とは異なる人たちの観察などから事実や知識を積み上げるといった理解をすること。

問10 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

41。

① 映画の撮影場所、いわゆる「聖地」を訪れる観光者は配慮に欠け、住民との間に軋轢を生む場合がある。

② パンデミックは、部外者が生み出した幻想が観光地の魅力となり得ることを気づかせるきっかけとなった。

③ 東京でも食べられる京都の商品を、観光者がわざわざ京都を訪ねて賞味することは、奇妙なことである。

④ 観光地の住民は、その土地の実際からはかけ離れてしまっている部外者が生み出した幻想に迷惑している。

⑤ 人には、「根本的帰属の誤り」という、対立した相手の愚かさをあらゆる面から確認する傾向がある。